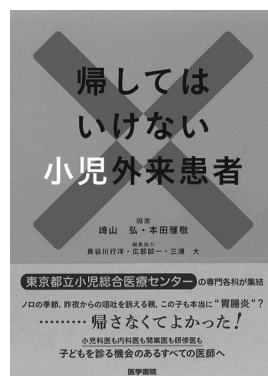


崎山 弘, 本田 雅敬●編

帰してはいけない小児外来患者

評者

市川 光太郎 (北九州市立八幡病院小児救急センター病院長)



●小児(救急)診療の楽しみが倍増する1冊

長い間、小児救急医療に携わってきたが、その多くは軽症疾患であり、重篤な疾患は稀であることは間違いない。しかし、なぜか、慢心な気持ちが湧けば湧くほど、重篤な疾患に遭遇してしまう皮肉な結果を嫌というほど思い知らされてきた。そこにはピットホールに陥りやすいわれわれ医療側の診療姿勢が見え隠れしているのだと思っている。いかにすべての患児家族に不安をもたらすことなく、的確な診断治療に直結するスキルを自分自身が養い、後輩たちに継承するかは小児救急医(臨床医)の永遠の課題と常々考えてきた。

本書を読み、この自らの問いへ答えてくれる本に出合ったという想いに溢れ、もっともっと救急現場に立ちたいという気持ちになった。楽しみながら仕事をするという本質的な部分を感じさせる本なのかもしれないと感じ、嬉しくなった。

Pearl case の 40 例はまさに「目から鱗」の症例が詳述されている。「教訓」としての「転機」の数々が示され、最

後に「TIPS」が総括してくれ、考察能力の幅・深さの向上を支援してくれている。その考察プロセスの解説には共感するだけではなく、自分の不勉強さを思い知らされ、すぐさま臨床で考察の幅・深さが生まれるストーリーが流れている。教科書ではなく、小説のように読み流したとしても、その考えはおのずと自分自身の身に、考え方にフィードバックされて、まさに「深読み」のできる臨床医になれそうである。加えて、単なる common disease と流してしまう症例に輝石を見いだせ、救急診療を行う楽しみが倍増しそうである。また、必要時は似た症例を探すこともできるだろうし、巻末に「ケースブック診断名一覧」が掲載されていることから、繁忙な外来中でもサッと自分の診断の幅・深さの確認ができるよう工夫されており、とても現場で役立つことと思われる。

何よりも感服したのは、序章にあたる第1章である。「死の合図に該当」で表されているように、診療における診断プロセスの基本姿勢を、「無知は救いようのない誤診を招く」「主訴を適切に聴取しないと診断はできない」

「鑑別診断が頭頭になければ、診療はできない」「診断に至る基本的な思考回路を理解する」「誤診するリスク(危険性)を過小評価するバイアス」と5項目に分けて、症例を引き合いに、アカデミックに解説されていることが素晴らしい。まさに、救急現場に出る前に読むことで、背筋が伸び、襟を正しての診療姿勢を保てるであろう。ことさら、「誤診するリスク(危険性)を過小評価するバイアス」の内容における、「思い込みがあった」「アンカリング」「必要性」「慣れ」「稀有性」「時間的な逼迫」「担当者の心身の健康状態」「スタッフの連携不足」「利害関係」「限界を超えた多忙」の10ポイントは、日頃より感じて言葉や活字にしてきたことと自分ながら異口同音だと共感を覚えた。

まさに、経験を問わず、「子どもを診る機会のあるすべての医師」に読んで欲しい一書であることを確信した。

A5・頁224 2015年4月 医学書院
定価 本体3,600円+税
[ISBN978-4-260-02138-8]